

「日蓮自筆文書の継承と伝来」

立正大学仏教学部講師・日蓮教学研究所研究員 高森大乗
於、仏教図書館協会研修会
平成一五年九月二七日、立正大学大崎校舍第七会議室

① 日蓮



鎌倉中期の僧。日蓮宗（法華宗）の開祖。生歿年は、承久四年（一二二二）二月一日（伝）弘安五年（一二八二）一〇月一三日。幼名は善日磨・薬王丸。房号は是聖房と名乗った時もある。諡は立正大師。生まれは安房国小湊（現、千葉県）。

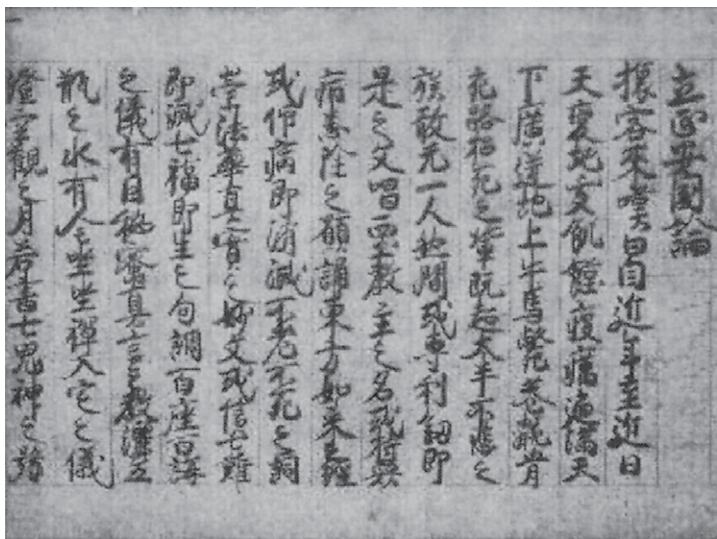
一二歳の頃から安房の天台宗系寺院清澄寺で初等教育を受け、一六歳で出家、鎌倉・京畿の諸寺に遊学。建長五年（一二五三）四月二八日、清澄寺で法華信仰を表明（立教開宗）、浄土教を批判したため同寺を追放され、相模国鎌倉で布教を開始。文応元年（一二六〇）七月一日、法華信仰勸奨と念仏信仰禁圧を提言する『立正安国論』を執筆し、前執権北条時頼に提示するが、翌年弘長元年（一二六一）五月二二日、捕らえられて伊豆国伊東へ流刑。弘長三年（一二六三）、流罪を赦免されてからも、法華信仰を主軸とした諸宗批判と幕政

批判を続ける。文永八年（一二七二）九月二二日、幕府は日蓮と門弟の言動を反社会的運動として弾圧。日蓮は相模国竜口での斬首の危難を免れ、佐渡国へ配流。配流中、信仰と思想の深化を『開目抄』『如来滅後五百歳始観心本尊抄』に表す。文永十一年（一二七四）に赦免されてからは、甲斐国身延山に入山、著作活動と門弟教育に専念する。弘安五年（一二八二）、病のため身延を下山し、武蔵国池上の池上宗仲邸で、後事を日昭・日朗・日興・日向・日頂・日持ら直弟六人（六老僧）に託して歿した。

- | | | |
|-------------|----|---|
| 貞応元年（一二二二） | 1 | 安房国小湊に誕生（父 貫名重忠・母 梅菊）。 |
| 天福元年（一二三三） | 12 | 清澄寺入山、道善房に師事する。 |
| 嘉禎三年（一二三七） | 16 | 出家、是聖房と名乗る。 |
| 暦仁元年（一二三八） | 17 | 鎌倉遊学。 |
| 仁治三年（一二四二） | 21 | 京畿遊学。 |
| 建長五年（一二五三） | 32 | 四月二八日、立教開宗。この頃から日蓮と名乗る。 |
| 文応元年（一二六〇） | 39 | 七月一日、『立正安国論』を述作し、前執権北条時頼に上呈。 |
| 弘長元年（一二六一） | 40 | 八月二七日、鎌倉の草庵を夜襲される。…松葉谷法難 |
| 弘長三年（一二六三） | 42 | 五月二二日、伊豆国伊東へ流罪。…伊豆法難 |
| 文永元年（一二六四） | 43 | 二月二二日、伊豆流罪を赦免。 |
| 文永八年（一二七二） | 50 | 一月二二日、安房国長狭郡で東条景信に襲撃される。…小松原法難 |
| 文永九年（一二七二） | 51 | 九月二二日、佐渡流罪決定、一三日、鎌倉片瀬龍口で斬首を免る。…龍口法難 |
| 文永一〇年（一二七三） | 52 | 一〇月一〇日、相模依智を発ち、二八日、佐渡に到着。 |
| 文永一一年（一二七四） | 53 | 一月、佐渡塚原で念仏者と問答（塚原問答）。 |
| | 54 | 二月、『開目抄』を述作。同月、京都で二月騒動（北条時輔の乱）おこる。 |
| | 55 | 四月二五日、『如来滅後五百歳始観心本尊抄』を述作。 |
| | 56 | 二月二四日、佐渡流罪を赦免。三月三日、佐渡出発、三月二六日、鎌倉帰還。 |
| | 57 | 四月八日、平頼綱と面談（第三国諫）。五月二二日、鎌倉を発ち、一七日、身延入山。 |
| | 58 | 一〇月五日、文永の役勃発。 |
| | 59 | 六月、『撰時抄』を述作。 |
| | 60 | 七月二二日、『報恩抄』を述作。 |
| | 61 | 六月、門弟の三位房日行・四条頼基らが龍象房と問答（桑ヶ谷問答）。 |
| | 62 | 八、一〇月、駿河方面の門弟に弾圧が及ぶ（熱原法難）。 |
| | 63 | 六月、弘安の役勃発。 |
| | 64 | 九月八日、身延下山、一八日、武蔵国池上邸に到着。一〇月一三日、同地にて入滅。 |

② 『立正安国論』(千葉法華経寺蔵、国宝)

『立正安国論』。真蹟は千葉中山法華経寺の聖教殿に所蔵されている。本紙は、界線を引いた罫紙を使用する。日蓮が本書をしたためたのは文応元年(一二六〇)であるが、オリジナルは北条時頼に提出してしまつたので現存しないとされる。ただ、日蓮は常に『立正安国論』の下書を所持して、しばしばこれを書写・複製・改訂している。『昭和定本日蓮聖人遺文』所収の中山法華経寺本もそのうちのひとつで、文永六年(一二六九)二月八日に完成したものである。『立正安国論』は全三種の存在が確認され、別本は身延山久遠寺にもかつてあったが明治八年(一八七五)の大火で焼失、京都本圀寺には『立正安国論(広本)』(建治・弘安の交)が現存する。このように、日蓮は、本書をことのほか重視していたようである。中山本は千葉氏の矢木胤家の依頼を受けて書写したものであったが、日蓮歿後の一三世紀末、心ない弟子によって、当時の武士の教養書とされた『本朝文粹』を書写するための紙として使用されてしまう。一七世紀初頭に功德院日通によって、『本朝文粹』の全文が、ハケに水を含ませて徹底的に消去するという方法で消されたと伝えられる。



③ 日蓮自筆文書について

日蓮の書き遺した文章類を総称して、「日蓮遺文」あるいは単に「遺文」と呼んでいる。宗門では、古来より「御書」「祖書」「聖教」「御妙判」などの呼称で呼ばれてきた。宗門では、古来より「御書」

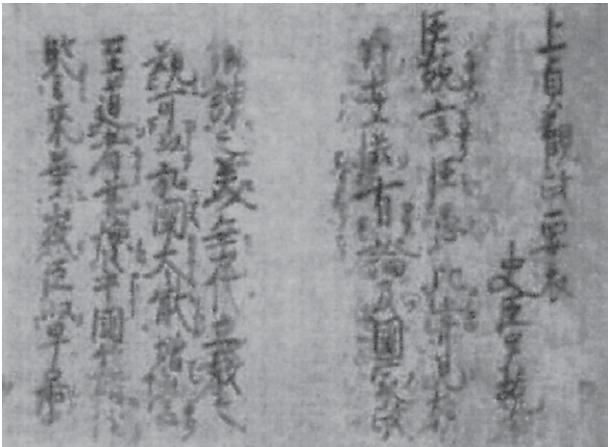
遺文は、その内容から、大別して、著作・書状・図録・書写本(親写本)・要文・書入本などに分けられる。著作とは、日蓮が撰述・述作した教義書の類である。日蓮の手になる大部の著作のうち、『立正安国論』『開目抄』『如来滅後五五百歳始観心本尊抄』を「三大部」、これに『撰時抄』『報恩抄』を加えたものを「五大部」などと呼ぶ。他に『法華取要抄』『四信五品鈔』なども五大部に準ずる重要教義書として位置づけられている。書状とは、日蓮が当時の門弟(弟子・檀越)に充てた手紙・書簡の類である。『兄弟鈔』『下山御消息』などがある。なお、書状の中には『曾谷入道殿許御書』などのように、五大部に準ずる重要教義が記されたものもあり、著作と書状を厳密に区別することが難しい例もある。図録とは、日蓮が門弟との法門談義の際などにおいて図示したものと考えられている。図版の類である。『一代五時鶏図』『和漢王代記』などがある。書写本(親写本)とは、日蓮自ら経巻・書物等を書写した写本である。『授決円多羅義集唐決』『五輪九字妙秘密義釈』『貞観政要』などがある。要文とは、日蓮が各種の経論釈疏等から必要に応じて摘要を抜き書きしたものである。『依憑天台集要文』や『法華玄義要文』などがある。書入本とは、日蓮が経論釈疏の類に書き入れをおこなったものである。『注法華経』『秘藏宝鑰』がある。

以上の分類をもとに、現存する真蹟遺文についてその概数を挙げると、著作・書状で完全に伝存するものは一一三点、断片の存在するものは八七点、図録で完全に伝存するものは二二点、断片の存在するものは二九点が確認されており、そのほか遺文の断簡が現存するものは三五七点、要文断片は一四〇点、書写本は二三点を数える。このほかにも、日蓮自筆文書の一類として、大曼荼羅が一七幅が伝わるが、文章である遺文と、信仰の対象となる本尊とは一線を画するものとして把握されている。

日蓮筆『大曼荼羅』

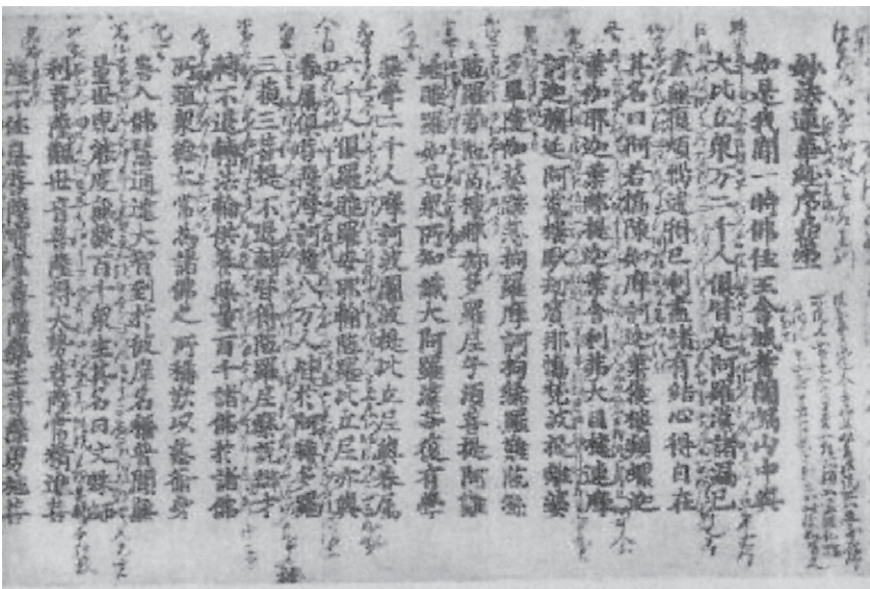


日蓮書写『貞観政要』



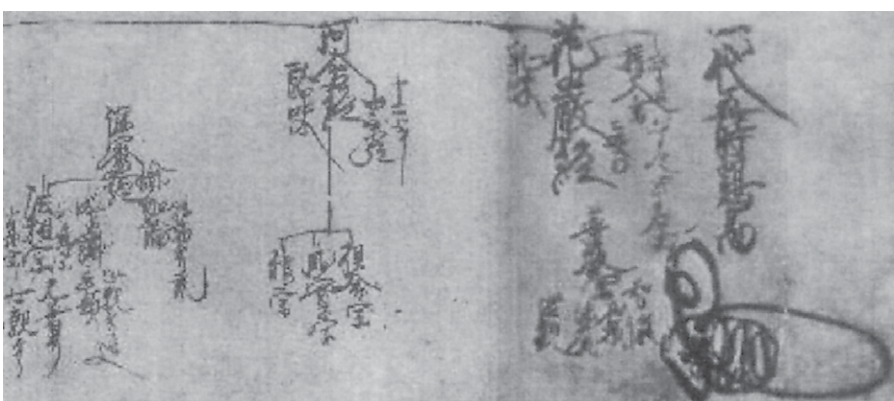
神奈川比企谷妙本寺蔵。弘安三年(一二八〇)三月。一〇紙継。縦一六一・五cm、横一〇一・七cm。日蓮が池上入滅に臨んで床頭に奉懸したところから、臨滅度時本尊とも呼ばれる。近年の修復作業により紙裏に日朗の記名が確認され本図が、六老僧の日朗に分与されたことが明らかとなった。

『私集最要文注法華經』（静岡妙法華寺蔵）

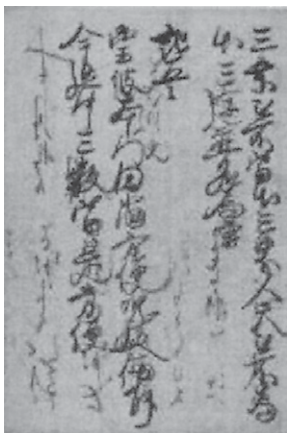


日蓮注。全一〇巻。『注法華經』
 『注經』などとも略称す。真蹟
 は静岡三島妙法華寺蔵。日蓮所
 持の法華三部經（『無量義經』一
 卷・『妙法蓮華經』八卷・『觀普
 賢菩薩行法經』一卷）で、經文
 の本文行間、天地、紙背に二二
 〇六章にも及ぶおびただしい量
 の經文・論疏などの要文の引用
 ・書き入れが行われている。な
 お、日蓮が所持したこの法華三
 部經は、春日版系統に属する
 法華版經（法華經の版本）を底本
 としているものと推測される

『一代五時鷄圖』（京都本圀寺蔵）

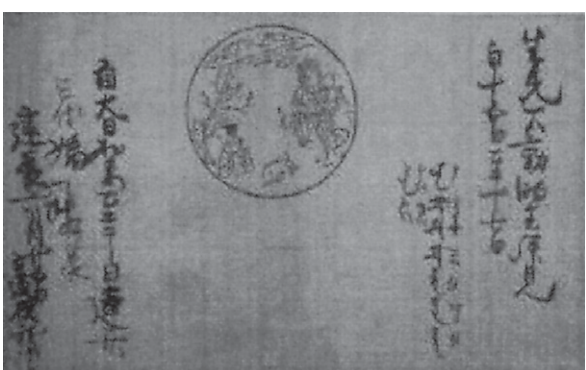
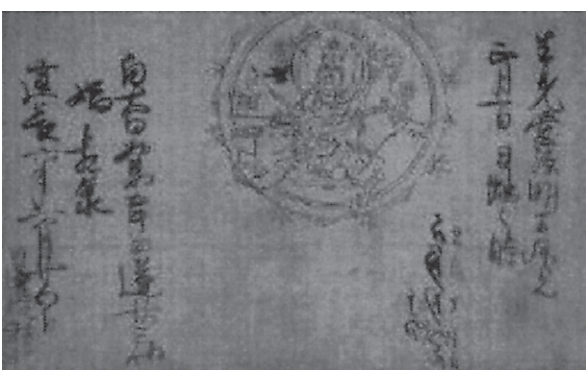


『天台肝要文集』（千葉法華經寺蔵）



日蓮遺文『富木殿御返事』の
 反故裏を利用して、日蓮自ら
 天台章疏の要文抜き書きを行
 ったもの。本文「三教」の部
 分の紙背に『富木殿御返事』
 の日蓮の署名が確認できる。

『不動愛染感見記』（千葉保田妙本寺蔵、重文）



⑤ 富木常忍（日常）



富木常忍（一一二六―一一九九）

富木常忍は、下総国若宮在住の日蓮の有力檀越。幕府の御家人であり、房総半島を席巻した豪族千葉氏に仕えた家臣でもあった。同じく千葉氏に仕えた下総中山在住の大田乗明や下総曾谷在住の曾谷教信らとともに、早くから日蓮を外護し、日蓮からその同心ぶりを賞賛されている。なかでも特に、富木常忍は、日蓮の立教開宗当初からの檀越であったことが知られ、日蓮歿後は、日蓮の著作や書状を蒐集・格護し、今日その多くが中山法華經寺の聖教殿に保管され、信仰の対象となるのみならず、日蓮研究に貴重な資料を提供している。

早い時期から日蓮と富木常忍の親交があったことは、日蓮の初期遺文『富木殿御返事』（『昭和定本日蓮聖人遺文』一五頁）の存在からも容易に推察できる。本書には、立教開宗後、ほどなくして日蓮が富木氏の許を往来していたことをほのめかす記述がみえる。

なお、本書の反故裏に、日蓮の筆になる「天台肝要文集」の要文抄出が見られる。富木常忍は、自らの許に届いた書状

や千葉氏との間で交わした文書などを集め、その裏面の白紙部分を再利用してもらったために日蓮に提供したと考えられている。本書は、日蓮が富木常忍に充てた書簡を、富木常忍が日蓮に再利用してもらったために返したもので、日蓮がその後（文永年間頃か）、『富木殿御返事』の反故裏を利用して「天台肝要文集」を書き入れたものと推察されている。

⑤ 日蓮自筆文書の継承と伝来

今日、我々が目にすることのできる遺文の伝存形態には、大別して、真蹟遺文・写本遺文・刊本遺文の三種がある。真蹟遺文とは、日蓮の直筆・真筆が現存するものである。代表的なものに『立正安国論』や『如来滅後五百歳始観心本尊抄』などがある。

写本遺文とは、日蓮の門弟が日蓮の書とされるものを書き写したもので、これには、かつて日蓮の直筆が存在（曾存）したが現在は失われ、門弟らによって書写されたもののみが伝わる場合と、真蹟の存否が確認されていないが古来より日蓮の遺文と信じられ、門弟らによって書写されてきたものが伝わる場合とがある。真蹟がかつて存在したことが確認されている遺文としては、『開目抄』などがあり、真蹟が伝わらず写本のみによって復元されている遺文としては、『聖愚問答鈔』『三大秘法稟承事』などがある。

やがて中世から近世にかけて、日蓮を渴仰する門弟たちによって、日蓮の真蹟遺文や写本遺文を蒐集・書写した遺文集の類が編纂されるようになる。これには写本『録内御書』や写本『録外御書』などと呼ばれるものがある。

ついで、主に近世以降に宗門内外において、日蓮遺文を影印化・活字化して印刷・発行した刊本遺文が登場する。古くは刊本録内・録外、明治以降では『高祖遺文録』『日蓮聖人御遺文』『昭和定本日蓮聖人遺文』等が版行されている。

日蓮の遺文の写真版を公刊したものに、日蓮聖人真蹟集成法蔵館編集部編『日蓮聖人真蹟集成』全一〇巻（法蔵館、昭和五二年）がある。本書には、『昭和定本日蓮聖人遺文』未収録の要文断簡類も計一九三点、および『注法華経』全巻表裏面の写真が収められている。

また、日蓮自筆の大曼荼羅を蒐集したものに、片岡随喜編『日蓮大聖人御真蹟』第一部「御本尊集」（立正安国会）、山中喜八編『御本尊集』『御本尊集目録』（立正安国会）があり、特に後者は、現在までに確認されている大曼荼羅の写真を公開し、目録においてそれらすべての系年、讚文、授与書、添書、寸法、所蔵、由来などを記録している。今日、日蓮染筆大曼荼羅の全容は、これらの書によって知ることができる。

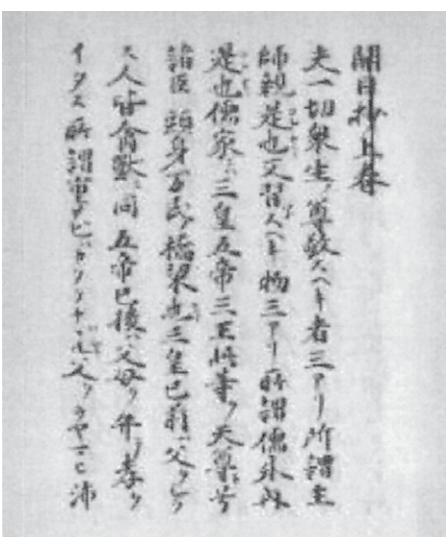
⑥ 『昭和定本日蓮聖人遺文』

『昭和定本日蓮聖人遺文』は、加藤文雅編『日蓮聖人御遺文（縮刷遺文）』（靈良閣、明治三五年）を底本として、昭和二七―三四年に亘り、望月敏厚・鈴木一成らによって編纂された。現存の真蹟ならびに古写本・刊本などと対照・校合し、著作年代や真偽を勘えて、「正篇」「統篇」「断簡」「断簡」「断簡」「断簡」の五輯に分けて、編年体に配列したものである。現在は、平成一二年に改訂増補がなされ、全四巻が刊行されている。

第一・二巻には、日蓮の真蹟あるいは真蹟として扱われてきた著作・書状のなかで、ほぼ完全に全体像が復元できるものが収められ、これを「正篇」と呼んでいる。建長五年の『富木殿御返事』から弘安五年の『波木井殿御返事』までの四三四篇が、編年体で収載されている。第三巻は、古来より日蓮の書と言われてきたが現在は疑問視されている五五篇が「統篇」として収められ、また日蓮が法門談義等に用いたとされる「図録」三〇編、遺文の断片が現存するものの全体像がはつきりしない「断簡」一九八篇、日蓮の講義を門弟（日興・日向）が記録したといわれる「講記」二篇が収録される。また、併せて、真蹟・録内録外写本等の「目録」の類が収められている。第四巻には、日蓮自身が経論疏を書写・所持していたものを収めた「親写本奥書」、一―三巻に漏れた新発見の遺文が収められる「正篇新加」「断簡新加」「図録新加」、全巻を通じた「索引」等が収載される。

なお、『昭和定本日蓮聖人遺文』は、全巻通し頁で一貫しているため、第一巻は一―九五七頁、第二巻が九五九―一九三三頁、第三巻が一九三五―二八七一頁、第四巻が二八七三頁以降となっている。

※ 『日蓮の肖像彫刻（東京池上本門寺蔵 木造日蓮坐像、重文）』は、中尾堯著『日蓮』（吉川弘文館『歴史文化ライブラリー』一三〇、平成一三年）より、『立正安国論』『大曼荼羅』『貞観政要』『不動愛染感見記』『天台肝要文集』『富木常忍（千葉日本寺蔵 木造富木日常坐像）』は、東京国立博物館編『大日蓮展』（産経新聞社、平成一四年）より、『注法華経』は、日蓮聖人真蹟集成法蔵館編集部編『日蓮聖人真蹟集成』第七巻（法蔵館、昭和五二年）より、『一代五時鶏図』は『日蓮聖人真蹟集成』（前掲）三巻より、『開目抄』は梅本鳳泰編『開目抄』（本山本満寺、昭和三九年）より、それぞれ転載。



寂照院日乾写本『開目抄』